

「木曾馬乗馬体験会 in 信州大学」の実施報告

竹田謙一*・松井寛二*・岡本敬子*・佐藤陽子**・田巻義孝***

* 信州大学農学部食料生産科学科

** 信州大学医療技術短期大学部

*** 信州大学教育学部

キーワード：アニマルセラピー、動物介在療法、動物介在活動、木曾馬、障害者乗馬

1. はじめに

近年、動物とのふれあいによる血圧低下、不安の排除と意欲の向上あるいはコミュニケーションの機会を広げるといった、生理的、心理的および社会的な効果について全国的に注目されてきている。このような活動は一般的にアニマル・セラピーとして知られている。アニマル・セラピーとは、Animal Assisted Therapy の日本語訳であり、正確には動物介在療法のことである。動物介在療法は、患者の治療を目的としており、医師を始めとして、理学療法士、ソーシャルワーカーなどが治療に参画し、適切なプログラムの下で実施される。一方、動物との触れ合いなどにより、人々が喜び、それをきっかけに会話を楽しむ活動として、動物介在活動がある。この動物介在活動では治療が目的ではないので、医師などの専門家が参画していなくても成立する。

筆者の一人である松井は、平成10年より附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター（以下、AFCと略す）において木曾馬の利活用に関する研究を進めてきた。かつて木曾馬は、農耕馬として使役用に利用されてきたが、農業の機械化に伴い、戦後、その数は激減傾向にある。これら木曾馬は洋種とは異なり、丸みを帯びた胴長短足という形態的特長から、乗用馬としての新たな利用法が模索されている。

そこで、特定非営利活動法人であるRDA (Riding for the Disabled Association) Japanの協力の下、木曾馬を活用した動物介在活動の取り組みを実施した。RDAとは、障害を持つ人たちにも健常者と同じように乗馬を楽しむことを提供し、健康や暮らしの質の向上を図ることを目的として結成された慈善団体であり、イギリスの本部を中心に、世界各国の支部で活動を展開している (RDA Japan

ブックレットより)。日本支部は、その前身時代も含め平成3年より活動しており、平成12年12月にNPO法人として正式に認可された。

本稿では、筆者らが実施してきたこれまでの活動について報告する。

2. プレイベントの開催

平成13年1月22日に「乗馬とリハビリテーションに関する講習会」をプレイベントとして開催した。本講習会は、一般の人に乗馬とリハビリテーションとの関係を啓蒙するために企画したものであり、本学部学生、福祉関係者、一般市民ら、約30名が参加した。

はじめにAFCの馬場において、実技講習として、RDA Japanの太田恵美子氏が同センターで飼養管理されている木曾馬を実際に使って、乗馬時に感じる体の動きの変化やウマから伝わる体温の暖かさを説明し、参加者もその効果を実体験した。続いて、本学部30番講義室に場所を移し、RDA Japanの理事長で日本獣医畜産大学の本好茂一名誉教授と太田氏による講演会が開催された。本好名誉教授はウマとヒトとの関係についての歴史的考察を、太田氏は障害児をもつ親の実体験を紹介し、身体的にも精神的にも障害を持つ人にもたらす乗馬の効果について講演した。

なお、このときのイベントは中日新聞、伊那ケーブルテレビに取り上げられた。

3. 乗馬体験会の取り組み

平成13年5月20日から今日まで計4回、「木曾馬乗馬体験会 in 信州大学」を開催した。主な参加者は、本学教育学部附属養護学校の生徒、本学医療短期大学部の教員が受け持つ患者ならびに農学部近隣の養護学校の生徒であった。第1回目の参加者は、

各乗馬会の参加者は、付き添いの家族も含めて約80名と最も多かった。その後、第2回目(平成13年9月21日)が41名(伊那養護学校のみを対象)、第3回目(平成13年11月18日)が23名、第4回目(平成14年10月5日)が35名の実績だった。

第1回目の乗馬会では、AFCの木曾馬が大勢の人がいる場所での乗馬に十分馴れてなく、開田村にある木曾馬トレッキングセンターから木曾馬2頭を借り受け、乗馬会に供用した。その後、AFCの木曾馬を馴致、調教し、2回目の乗馬会以降、これら2頭の木曾馬(名号は宝花号と幸藤号)を供用した。

4. 乗馬会の目的と実施内容

乗馬体験を通じ、そこに携わるインストラクターやボランティアとのコミュニケーションから社会化の活性化やウマの体温を通して伝わる「動物を愛しく思う心」を参加者に伝えることを第一の目的とした。また、農業の機械化に伴い品種の維持が危ぶまれている日本在来馬である木曾馬の利活用の1つとして、動物介在活動における乗用馬としての利用についても検討した^{1,2)}。

乗馬プログラムは、RDA Japanのインストラクター(有資格者)指導のもと実施され、1人あたり約6分間の乗馬を体験した。乗馬では騎乗者1人につきインストラクターの他、ウマを曳くリーダー、騎乗者の両脇で騎乗者を支持し、声を掛ける2名のサイドウォーカーが付いた。はじめに騎乗者は付き添うサイドウォーカーと共にウマの所へ進み、騎乗した。そして、騎乗者の「すすめ」という発進の合図からプログラムは始まった。途中、サイドウォーカーとのバトンの受け渡しや色合わせ、絵合わせクイズなど嗜好を凝らしたクイズやゲームを行った。これらゲームなどには、単に遊びの要素だけでなく、バランスの獲得、他者とのコミュニケーション、体側筋のストレッチ運動などの要素も含まれている。そして、乗馬終了時には騎乗したウマの顔をなで、「ありがとう」という言葉を掛けさせ、一連の乗馬プログラムは終了した。リーダーやサイドウォー

カーは、ヘルパーとして参画していたボランティアであった。ボランティアは乗馬会開催案内と同時に募集し、本学部学生、他学部学生、他大学学生、上伊那農業高校の生徒たちが集まった。乗馬会に際し、的確な乗馬プログラムを進行させるため、インストラクターおよびヘルパーが騎乗する障害者の障害の程度を把握する必要があった。そこで、乗馬会の開催通知時に騎乗者登録票と承諾書(資料1)を参加者に記入させた。また、参加者およびボランティアの万が一の事故に備え、南箕輪村社会福祉協議会を通じ、行事保険に加入した。その保険料は3回目以降、参加者負担とし、1家族100円を徴収した。

なお、これら取り組みは信濃毎日新聞、中日新聞、長野日報、南みのわ新聞等で大きく紹介された。

5. アンケート調査結果から見た参加者の期待

第1回、第3回および第4回乗馬会での参加家族に対し、アンケート調査を実施した。第1回目は郵送調査法で調査し、参加した26家族のうち19家族から回答があった(回収率73%)。また、3回および4回目には集合調査法で実施し、全参加者から回答を得た。各アンケートにおける多くの質問は選択回答とし、一部、自由回答形式とした。以下、いくつかの結果を紹介する。

第1回乗馬会において、「乗馬前後で何か変わったことはあるか」の質問に対し、自由解答とした。その結果、「馬という言葉に反応して笑う、喜ぶ」、「表情が良くなった」、「乗馬ができて自信がついた」という心理的効果や「上体がリラックスしている」、「体のバランス取りが上手になった」という身体的効果が回答された。また、「乗馬はプラスになるか」の質問に対し、回答を寄せた19人中18人が「はい」と回答した。さらに「乗馬は心理面、身体面および言語コミュニケーション面、いずれの側面で効果があるか」の質問(複数回答)では、それぞれについて14人、12人、7人がその効果を期待していた。

第3回目の乗馬会では、乗馬前後における騎乗者(障害児)の表情の変化を明らかにするため、図1

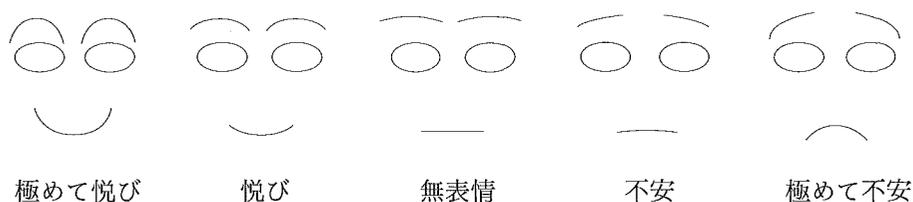


図1. アンケート調査に用いた模式的表情

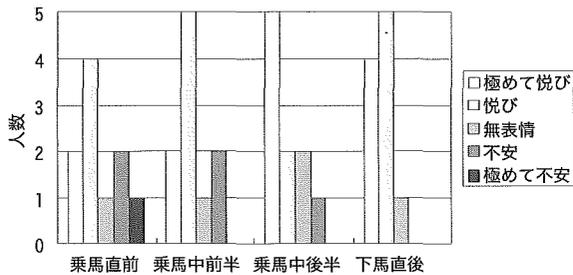


図2. 乗馬前後における騎乗者の表情変化

に示した5つの表情を付き添いの家族に提示し、回答してもらった。その結果、乗馬直前に「極めて不安」だった人が乗馬中には全く認められず、乗馬後半には「極めて喜び」の人数が急増した(図2)。また、乗馬直後に不安感を表出している人は皆無だった。

第4回目では、参加した8家族にアンケート調査を実施し、そのうち4家族が本乗馬会の参加経験者であり、「乗馬によるリハビリ効果の有無」について質問したところ、全家族が「とてもある」と回答し、今後も「木曾馬乗馬体験会 in 信州大学」への参加を希望した。また、その頻度について質問した結果、「半年に1回」という意見が最も多かった。さらに、参加者の費用負担について、「今後も今回と同様の乗馬会を開催する場合、インストラクター(交通費、宿泊費、技術料)、ボランティア(弁当、保険)に関わる経費を負担できるか?」の問いに、全家族が費用負担の必要性とその必然性を認め、自由回答による1家族あたりの平均負担可能額は約2200円だった。

このように乗馬による即時的な心理的、身体的および言語的改善効果は、各参加者が認めている。同時に、各参加者の身近に商業目的ではない乗馬を体験できる場がないことから、本学部で主催している乗馬会への期待は大きいと考えられる。事実、関係機関や参加者から、乗馬会開催についての問い合わせが多い。乗馬会開催に際し、最も問題となるのが運営資金の確保であるが、アンケート結果にも現れているように、参加者自身が乗馬会での必要経費を支払うことに賛同している。今後、参加者同士による実施グループを結成していただき、後述する課題を解決していきながら、乗馬会を継続していきたいと考えている。

6. 今後の課題

今後の課題として、資金および人員の2つの側面が挙げられる。今日まで、外部資金などによりイン

ストラクターの謝金、交通費や附属養護学校から農学部までのバス利用に関わる経費を賄ってきた。しかし、乗馬会にかかる経費は一時的な外部資金だけで維持することは難しい。また、インストラクターの資格を得るためには、相当の実務経験が必須であり、資格取得のための筆記及び実技試験を課せられ、合格したものに対してのみ、その資格が与えられる。したがって、多少の乗馬経験のある学部学生が簡単に取れる資格ではない。本報告のような乗馬会ではインストラクターの存在は必須であり、今後、活動を続けていくためには、その経費捻出が重要課題となる。

さらに、インストラクターだけでなく、ボランティアの確保も乗馬会の成否を握っており、ボランティア無しでは乗馬会の開催はあり得ない。今後、このような活動の啓蒙を推し進め、学部学生の積極的な参加を希望するところである。

アンケートの調査結果からも障害児を持つ家族からの要望は極めて大きい。今後も多くの面で全学的あるいは全学部的な支援をお願いする次第である。

7. おわりに

障害者のみならず、動物との触れ合いはあらゆる人々に命の大切さを考えさせる。殺伐とした現代社会において、幼児虐待や動物虐待が報道されている。動物に対する配慮は、弱者への配慮にもつながると考えられる。アメリカでは殺人、強盗犯の多くは、過去に動物虐待の経験を持つことが報告されている³⁾。

昨年より始まった小・中学校での総合的学習の中に動物との触れ合いを実施している学校が多くある。また、それら学校の多くは食農教育の一環として、牧場等での家畜との触れ合い、生命誕生、畜産物の生産、製造を経験させている。このような活動を受け入れている牧場は、酪農教育ファームと呼ばれ、近年、活動が盛んである。

さらに園芸の分野においても、養護学校や老人養護施設などで花卉栽培による心理的、社会的改善効果を目的とした園芸療法が実施されている。

本学部は、このような社会的ニーズを受け入れる要素をAFCという恵まれた環境の中に持ち合わせている。今後、農学部における大きな社会貢献の一翼として、AFCを基盤においた教育ファームや動物および園芸介在活動の三位一体の活動を期待する。

謝 辞

本報告で紹介した乗馬会は、平成13年度（研究代表者：松井寛二（農学部））および14年度（研究代表者：田巻義孝（教育学部））の学長裁量経費によ

るものである。また、乗馬会実施にあたりご協力いただいた RDA Japan の本好理事長、太田氏を始めとするインストラクターの方々、AFC の教職員の皆様、そして乗馬会にボランティアとして参画していただいた多くの学生諸氏に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Okamoto K, Matsui K, Takeda K., Case report-Effect of therapeutic riding by handicapped persons on the behaviour of Kiso horse-. In: P. Koene and the Scientific Committee of the 36th ISAE (Eds), Proceedings of 36th International Congress of ISAE, Wageningen, The Netherlands, 207, 2002.
- 2) 岡本敬子, 障害者乗馬における騎乗者とウマの運動解析および心理的变化, 信州大学大学院修士論文, 2003.
- 3) 山崎恵子, 動物虐待の“真”の意味を問う—欧米における調査・研究より. Relatio, 8, 28-33, 2001.

The report on Kiso horse riding experience event for disabled persons

Ken-ichi TAKEDA*, Kanji MATSUI*, Keiko OKAMOTO*, Yoko SATO**
and Yoshitaka TAMAKI***

*Department of Food Production Science, Faculty of Agriculture, Shinshu University

**School of Allied Medical Science, Shinshu University

***Faculty of Education, Shinshu University

Key word: animal assisted therapy, animal assisted activity, Kiso horse, riding for disabled persons

資料1

木曾馬乗馬会騎乗者登録票

記入日 年 月 日

ふりがな			性別	生年月日		
本人氏名			男・女	19	年	月 日
ふりがな			自宅 Tel :			
保護者氏名			Fax :			
			その他の連絡方法 (緊急時使用)			
			(連絡先: , 番号など)			
ふりがな						
住 所	〒 —					
学校名・団体名			かかりつけの病院・医師			
本人の愛称			身長	体重	ヘルメットサイズ	
			cm	kg	cm	
障害のタイプ・程度					手帳	
障害の内容	首のすわり	座 位	立 位	歩 行	聴 力	視 力
種 級						
具体的症状 (身体的・情緒的・知的面から詳細に記入してください。また、癖などありましたら記入してください。)						
乗馬以外の訓練・習い事など						
服用薬品名・用量						
加入している傷害保険名・保険会社名						
承 諾 書						
この度、信州大学農学部木曾馬乗馬会事務局で許可いただいた体験乗馬につきまして、本乗馬により私/我々が起こしました事故は、対人、対物に関わらず、すべて私/我々がその危険を負担いたします。そして、この乗馬に起因するすべての損害賠償請求権、起訴、その他一切の請求を永遠に放棄し、貴事務局には一切ご迷惑をお掛け致しません。(未成年者は保護者が記入)						
氏 名			住 所			
電話番号	()		日 付	年 月 日		
署名・捺印			㊟			